

平成30年度 第4回 知事広聴「平太さんと語ろう」 記録

【日時】平成30年10月18日（木）

午後1時30分～3時30分

【会場】森町文化会館 小ホール

1 出席者

- ・ 発言者 袋井市及び森町において様々な分野で活躍中の方
6名（男性3名、女性3名）
- ・ 傍聴者 130人

2 発言意見

| 番号 | 分野・所属 | 項目 | 頁 |
|------|---------|----------------------|----|
| 発言者1 | 地域振興 | 森町の魅力発信、地域活性化 | 2 |
| 2 | 子育て | 不育症、低出生体重児及びその家族への支援 | 4 |
| 3 | 農業 地域活動 | 新規就農者による地域の特産づくり | 9 |
| 4 | スポーツ | ラグビーワールドカップの機運醸成 | 11 |
| 5 | 教育 地域医療 | 子どもの学習支援、地域医療を守る活動 | 21 |
| 6 | 商業 | 森町の食材を活かした菓子づくり | 24 |
| 傍聴者1 | — | 国際交流の活性化 | 30 |
| 2 | — | 天竜浜名湖鉄道への観光列車の導入 | 30 |
| 3 | — | 専業主婦への偏見 | 31 |

【川勝知事】 皆様、こんにちは。遠州の小京都に参りまして、森町、袋井の町民、市民の代表の方、男女3人ずつお越しいただきました。

この会は、私の意見を言う場所ではなくて、広く皆様方のお声を聴くという会でございまして、広聴会という会でございます。私も昨日からこちらの方に入っておりまして、移動知事室というふうに名付けておりますけれども、静岡県下広うございますので、県下に出かけること、もう2,500回を優に超えておりますけれども、例えば、ここは比較的来やすいといっても、水窪であるとか、あるいは南伊豆だとか、井川だとか、非常に広うございまして、例えば南伊豆などは、静岡市から出かけていっても半日近くかかって向こうに行って30~40分の仕事をして、また半日かけて帰ってくると、なかなか仕事はかどらぬということで、移動知事室というのを始めまして、そこに泊まり込んで朝の1番から仕事をするというその移動知事室を、今回は中東遠の総合庁舎、磐田に知事室を置いて、それでこちらで皆様方と交流している。

昨日も、実は太田川ダムのすぐ下流のところで、水が濁っているという話を聞きましたので、町長さんや議長さんと御一緒に現場を見に行きまして、その対処の方法を一緒に考えるということをしてまいりました。また、いろいろと今回農業に被害が出ましたので、その現場も見て、直接にお話を聞いたり、対処策を一緒に考えるということをしておるところでございます。

今日はお話を聞いて聞きっぱなしというふうになってはいけないということで、それはこの広聴会59回目になりますけれども、1度として聞きっぱなしのものはありません。しっかりお聞きして、この場でお答えできることはこの場でお答えすると。お聞きして、すぐに答えができないこと、あるいは調べなくちゃいけないこと、こうしたことは持ち帰りまして、必ずお返事すると、こういう形で進めておりますので、皆様方もそういうつもりで、今回の2時間が有意義なものになりますように努めてまいりたいと思いますので、どうぞよろしくお願いを申し上げます。

【発言者1】 初めまして、森町地域おこし協力隊の発言者1と申します。今日はよろしくお願ひします。座って挨拶をさせていただきます。

私2年前に森町に移住をしまして、今日は移住者である私が、こういった代表の場で話させていただいて、大変恐縮しておりますけれども、よろしくお願いをします。

もともと私は浜松市の出身でして、実家がここから約1時間ぐらいの場所にあります。

森町の落ち着いた雰囲気であったり、文化、そして自然豊かなところに惹かれて移住を決めました。浜松が決して嫌いな訳ではなかったんですけども、会社員を辞めて新しい環境に行きたいということで、生活環境を変える意味だったり、あとは地域おこし協力隊の活動に興味がありまして、移住を決めました。

森町に来てまず驚いたことといえば、森町の人々の郷土愛ですね、地域を愛する心が森町の方はすごくあると思っています。基本的に森町の方は森町が大好きで、秋の祭りを中心として、とても皆さん団結をしていて、それをすごくみんなが誇りに思っているところがあります。

移住して協力隊の活動をやっている中で、まずは自分自身が何かをするというよりは、地域の方が今やろうとしていること、それに対して自分自身が協力できることをやってくというところから始めました。

その1つが、茶園を中心とした景観を生かした地域活性化の事業です。静岡の「美しい茶園でつながるプロジェクト」という県の事業がありまして、それに森町の三倉・天方地区が採択をされました。三倉の大久保地区には美しい立体集落の茶園があったりですとか、森町の鍛冶島地区には半夏生の小径ですね、すごくとてもきれいな湿地帯があります。そういうところを地域の方を手伝いながら紹介するPR動画をつくらせていただきました。

そういった中で、鍛冶島地区は県の景観賞もいただくことができまして、地域の方はとても励みになったと思います。

地域おこし協力隊の活動の中で、自分自身が今2年経つんですけども、何か大きなことを成し遂げた訳では決してないんですけども、協力隊の活動をしながら、小さな宿を約1年前にオープンすることができました。少しずつですけども、お客さんも入ってくださって、そういった方が森町のお店を利用してくれたりですとか、そういったことにつながっていくようなことをしていきたいと思っています。

また、森町にも若い方がたくさんいらっしゃるんですけども、夏には、商店街が少し寂しくなっているんですけども、そういった場所で若い人たちと一緒に小さな夏祭りを開催することもできまして、そのときは多くの方で商店街がにぎわって、喜んでいただいたこともありました。

地域おこしという言葉には、特に正解なんてないと思うんですけども、これまでの2年間で思うのは、やっぱり誰にやってもらうとか、行政にやってもらうということでは

くて、地域の人たちが主体的にこういったことをやりたいということがあって、それに対してやっぱり行政だったり、自分みたいな立場の方が協力していくことで、地道ではあると思うんですけども、みんなが元気になっていくんじゃないかなというふうに思っています。

会社員の生活とは全然違う生き方を今しているんですけども、すごく僕は森町で生かされているというように実感しています。

しかしながら、私がよく伺う中山間地域の三倉・天方地区は、やっぱり年々高齢化が進んでおりまして、若い人が地域を離れるケースというのも、とても多いと聞きます。数年後には森町の小中学校も統合される予定でして、三倉・天方地区には学校がなくなるということも聞きました。

今日は広聴会ということで、自分の意見を言う場だと思うんですけども、知事に質問といたしますか、多分今後日本中で人口が減っていく中で、小規模校というか、そういうところを残していくというのは、なかなか難しいことであるとは思っているんですけども、やっぱり学校がなくなっていくと、若い方であったり、移住する方も減っていくんじゃないかなということを危惧してしまっていて、学校がなくなるとか、存続するということは別として、やっぱりそれに対してそういった状況の中で、地域であったり行政がどういうふうに動いていけばいいのかというのを、率直な御意見としてお聞きできればと思います。よろしくお願ひします。

以上で、私の意見発表とさせていただきます。ありがとうございます。

【発言者2】 袋井市から来ました発言者2と申します。よろしくお願ひいたします。

私は神奈川県川崎市出身で、結婚を機に袋井市に来て12年になります。元々こういう場でお話をさせていただけるような体験は少なく、割と敷かれたレールに乗って進学してきました。将来はお母さんになれたならいいなということで、夢を見ながら、一時期、保育士などの仕事をしてきました。

結婚しまして、結婚したらすぐにでも赤ちゃんが欲しいと思っていたんですけども、そこで大きな困難がありまして、結婚10年目にしようやく我が子を授かることができました。この出産を機に、経験してきたことを生かしていきたいと思って、2つの活動を始めました。

御紹介いただきましたように、不育症そだってねっと静岡と、クローバーの会の紹介をさせていただきたいと思います。

不育症そだってねっと静岡の方ですけれども、こちらは横浜市で発足した不育症そだってねっとという不育症への理解や公的支援を求める患者会が母体でして、その静岡県支部を昨年2月に立ち上げました。

「不育症」と聞いても、なかなかなじみのない方の方が多いんじゃないかと思うんですけども、妊娠はするけれども、お腹の中で赤ちゃんが育つことがなくて、流産ですとか死産、生まれても1週間以内に亡くなってしまうというようなことを繰り返してしまう状態のことを「不育症」と呼んでいます。

私自身は原因がわからない流産を繰り返してしまっていて、治療を経て出産をしました。適切な治療を受ければ80%以上の方が出産できると言われています。厚労省の方の調査でも、年間約3万人以上の不育症患者の方が出現していると発表してしまっていて、決して少なくはないのかなと思います。でも、流産はよくあることだからということで片付けられてしまっていて、悲しい思いをしている女性が数多くいます。

不育症は偶然繰り返すだけこともあるんですけども、検査で原因がわかることもあり、治療法も進んでいます。治療費は自費になりますが、静岡県で平成29年度からだと思っておりますけれども、助成制度を導入していただきまして、今は全国に相談窓口があります。

実際にこういった制度ですとか、窓口を知らずに、申請や相談に結びついていない現状があるのではないかなと危惧しています。静岡県支部では当事者や家族を対象とした交流会、あとはネットを通じた情報発信をしておりますので、今後もこうした活動を続けていきたいと思っています。

静岡県で10月6日土曜日にありましたけれども、「不育症こころとからだのセミナーカフェ」というものを開催していただきまして、今後も引き続きこちらの方を継続していただければありがたいと思っています。

次にクローバーの会の方ですが、こちらは袋井市近隣の低体重で生まれた赤ちゃんとお母さんを応援しようということで、月に1度親子サークルを約2年前に始めました。

我が子は小さく生まれまして、子育てについて身近に相談できる場が欲しくて、当時は浜松市に未熟児育児交流会というものや、リトルエンジェルという先輩サークルがありまして、そこに参加して、とても助けられてきました。袋井市でも同じ立場の保護者同士が

話せる場をつくって、親子の愛情が深まるようなサポート活動ができたらという思いで始めました。

低体重児というと、御存知でいらっしゃるでしょうか。2,500グラム未満で産まれてくる赤ちゃんのことで、今10人に1人の割合で産まれて、理由はさまざまですけれども、増加傾向にあるそうです。

そのような現状がある中で、当事者としてサークル活動とか、我が子の子育てをする中で、小さく産まれても、その子のスピードで着実に成長していくこと、我が子が産まれてくれた喜びなどを外部に伝えたいという思いが募りまして、仲間の賛同を得て、昨年度袋井市さんとの協働事業で、小さく産まれた赤ちゃんの写真展を開催しました。写真とともに、出産時のエピソードや我が子へのメッセージを添えて、市内3カ所で展示させていただき、多くの方に見ていただきました。

その後、サークルの参加者は実は減ってきていまして、今は市内の「うぶごえ応援隊HINA」という別の団体の協力を得て合同開催していますが、今後も活動を周知しながら、子育てを楽しめる環境をささやかながらつくっていけたらなと思っています。

今年の春からは、小さく産まれた赤ちゃんのための「リトルベビーハンドブック」という母子手帳が静岡県の発行になりまして、こちらは更なるお母さんたちの力につながるのかなと思います。

最後になりますが、袋井市でこのような活動をさせていただけることを大変感謝しております。以上です。ありがとうございます。

【川勝知事】 どうも発言者1さん、発言者2さん、ありがとうございました。お2人に共通しているのは、それぞれ外からいらしたということですね。発言者1さん、森町の魅力に気づいていただきましてありがとうございます。

今新東名で森町のパーキングエリアが大変に人気ですね。来やすくなったと、小國神社とか、大洞院とか、さまざまな名所がございますし、トウモロコシができるころには県外からも暗いうちから並ばれるということで、交通のアクセスがとてもよくなったということも、発言者1さんがこちらに来られた、つまり実家の方にもすぐ帰れるということもあると思いますが、宿をおつくりになったと。

ここ泊まるところがあまりないんですね。全部袋井にとられているとか、とにかく、これだけお越しになられて、こちらでおいしい食事や、一杯いただかれたときに、車の運転

できませんから、そういうことを前から私も気がついていたんですけれども、発言者1さんが自らそういう宿を立ち上げて、徐々に繁栄しているということで、何よりのことだと思っております。

私はずっと知られるに値するだろうと。景観がきれいだし、それから食がいい、あとは枕だけなんです。足もいい、そしてあごにとってもいいと。枕、つまり寝るところが課題かなと。そういうことでいろんな人がいらっしゃるので、発言者1さんのようなところに泊まる人も、それから若干高級感のあるところだとか、それぞれの懐具合、そのときの経験に応じて、そういうところがあればいいかと、正直思っているところであります。

それから、御質問がございましたね。だんだん少子化ということで小中学校、また高校も合併が進んでおります。私がちょうど知事になりましたときに、今日はこれが終わりましたから、遠江総合高等学校の学生さんと、新しく周智高校と一緒にどうですかということで、意見交換に参るんですけれども、比較的スムーズにいったようですが、実は私知事になりましたから、高等学校の合併ではものすごい議論があって、例えば西の方、浜松では二俣高等学校と天竜林業高等学校、これはもう激しい議論がありました。

あるいは今は掛川にあります高等学校と、それから御前崎にあります高等学校を合併するということですね。これもものすごい議論がありまして、これはもう教育委員会がなされる訳です。そこに容喙してはいけないので、政治が教育の世界に干渉するということではできないようになっています。中立・安定・継続というのが、中でも中立というのがとても大切ですが、今総合教育会議というのがあります。森町の首長様も、教育委員会の皆様方と意見交換する場というのがございまして、そこで意見を言うことができるんですね。

その意見に従って、教育委員会の方でお決めになれば実行できるということになりました、変な意見で教育の世界に支障があつてはいけないということで、私自身もそれは心して、総合教育会議に私が出ていく前に、「地域自立のための『人づくり・学校づくり』実践委員会」というのを立ち上げて、4年目、5年目になると思いますけれども、そこには民間の方に入っていて、2時間ぐらいずっと意見を聞くと。

そしてその意見を持って総合教育会議に臨む。総合教育会議で私が勝手な解釈をしてはいけないので、その実践委員会の委員長先生、もしくは副委員長先生に同席していただいて、そして実践委員会でお決めになったことを教育委員会にぶつけるというふうに行っている訳です。

そうした中で、高校の問題もこの実践委員会の方で出てきました。教育委員会の方は、今高校のことを申し上げていますがけれども、大体8クラスが適性規模であると。

少なくなれば先生が子どもたちに接する機会が多くなるんじゃないかと普通は思いますよね。ところが、学級が少なくなると先生の数を少なくしろという文科省の命令があるんですよ。したがって、学級が少なくなると、いろんな科目を教える先生を整えることができなくなるということになって、おかしい制度ですね。

それからまた、中学校、小学校は、これは市町がなさっておられますけれども、小学校にしろ、中学校にしろ、立地が全部いいところにある訳ですね。一番行きやすいところにつくられているということがあります。そして皆それぞれの小さなときの思い出の根拠地でありますから、ここをどう残すかということは、本当に真剣に考えた方がいいと。

小学校、中学校は元々なかったじゃないですか、江戸時代まで。だけど、森町の国学のレベルがものすごく高いではありませんか。そして、我々義務教育で無償でやってもらっている。我々の税金を使ってやっているだけですから、だから自分たちの地域の子どもは自分たちで育てると、そういう方向が実は総合教育会議というものを設けた背景にあります。

特に森町のような歴史があって、何しろ701年に勅使が来ている訳ですから、奈良時代以前ですよ、710年でしょう。それ以前に勅使が来られるくらい、すごい長い歴史と、すばらしい風景があるところです。こういうところで、子どもたち、小学生、中学生、今のせっかくつくった建物をどうつくるかというのをできない訳がないというふうに思っております、ですから実は発言者1さんと気持ちは同じなんです。制度的にできない。

それをどう取っ払うかということで、今高校レベルでは県のレベルですから、私は御前崎に1校しかない高等学校と、それからいろんなことをしている掛川にある横須賀高校というのがあるんですが、地域のために一生懸命やっている訳です。両方とも大切だから、いかにしてこの両方が残れるかということを実践委員会で今議論していただいて、ひょっとすると流れが変わるかもしれません。

ですから皆様方も、こういうこちらで起こっている合併を当たり前と思わないで、どうすれば子どもたちを自分たちの責任において地域ぐるみ、社会総掛かりでできるかと、こういう知恵を一緒に絞りたいものですね。こちらでロールモデルができれば、ほかの地域も同じような問題を抱えていますから、活用できるんじゃないかと思っております。ちょっと長くなってすみませんでした。

それから、発言者2さんは神奈川県から来られて、横浜の不育症そだってねっとの支部をこちらに立ち上げられて、袋井がそういうことに対して非常に寛容であるということで、この不育症について、我々もちょっと認識が遅れていたんですけれども、昨年県議会で認めていただいて補助をしていこうと。それは県における補助ですから、それは限りがあります。と同時に、やっぱり悩みを抱えている人たちがネットワークを組んで、お互いに話し合えると、悩みを聞いてもらえるという、そういうのがあることが、実は当事者にとっては一番安心であります。

クローバーの会も全く一緒ですね。こういう低出生体重児の人たちに対して、自分の考えや自分の心配を聞いていただく場があるということで、また大人しそうにお見えになる発言者2さんですけれども、非常に活発ですね。ものすごいパワーを感じました。そのクローバーの会の人数が少なくなったので、別の会と交流してやるということで、そして最後には袋井でそういうことに対して直接間接に応援されているということで、こっちに来られてよかったなど。

ですから、こういう困っている不育症の方とか、低体重児で子育てに困っている方たちを応援するということは、今少子化のときにとっても大切で、こういう方の存在は誠に袋井にとってはありがたいし、こういう人たちが他にも増えていければというふうに思った次第でございます。ありがとうございました。

【発言者3】 森町で農業をしております発言者3と申します。よろしく申し上げます。

先ほど会食で、大切なことは一番初めに言った方がいいですよと知事からお話しいただいたので、まず初めに、私は要望というか、ちょっと知事にお願いしたいことを話してから、私のことを話したいと思います。

知事のお話ってすごい人を引き込んで、はっきりしゃべってくださるので、すごく嬉しくて、今後県として明確なビジョンを常に示していただきたいなというのと、私、森町大好きなんですけれども、この森町のような小さな市町村でも、自分たちのまちに誇りを持ち続けて、そして豊かに生活していただけるような県としての支援をよろしく申し上げます。

私は福島県いわき市出身です。「フラガール」という映画を皆さん見たことがあるかと思うんですけれども、その「フラガール」の舞台となったスパリゾートのすぐ近くで生を

受けました。御縁がありまして大学を卒業してから、袋井市の企業に勤めさせていただきました。

そこで主人と出会いまして、結婚するにあたり、どこか住むところを探さなきゃいけない。普通の家よりは、ちょっと古い、自分たちで手直しができるような歴史のある建物を手直ししながら生活していきたいねということで、袋井からどんどん探していったら、森町でとても素敵なお家に出会うことができました、そちらを購入して、こちらの森町に移住させていただいています。

その後ちょっと何だかんだありまして、一旦東京の方に主人の仕事がありまして、森町を離れることがあったのですが、3.11、あの東北の大震災のときに東京は大きな被害を受けまして、主人が2日間ほど仕事のため帰ってこれないということがありまして、これはまずいだろうと。そのときの生活は、私が昼間働いて、主人が夜、もう全然生活がずれていたんですね。話をするのがなかった。

それで災害に遭って2日間お家に1人、こういう生活を続けていいのかと思って、そのときに森町の生活を思い出して、さらに震災があったときに、やっぱり福島で弟家族と母がいたんですが、とにかく避難しないといけないということで、森町の家は空き家になっていたものですから、とにかくそちらに行ってくださいということで、避難してもらったんですけれども、そのときに周りの近所の方がすごく厚く支援してくださって、弟はそれに感動したというか、自分も頑張らなきゃということで、ふるさとのいわき市に帰ることができまして、その話を聞いたときに、私も森町に帰るべきだろうと、確かに都会の生活は刺激的ですけれども、森町に1回帰りたいなと思って、主人とまた戻ってきました。

帰ってきたときに仕事どうしようかなと思ったときに、ハローワークに通っていましたが、職業訓練に農業科というのがありまして、それで半年間農林大学校、いわゆる農林大学に通わせていただいたんです。そのときに農業ってすごく地域に根差した仕事なんだと。森町もすごく農業が盛んでしたので、これでずっと地域に根差した生活ができるだろう、じゃ農業やろうかということになりまして、本当に皆さんに御協力いただきまして、農林事務所にも相談に行って、農協さんを経由して1年間支援してくださり、農家さんの所で1年間研修させてもらって、露地野菜の経営、育て方とか、ちゃんと農業をやっているような指導を受けまして、現在6年目になります。

本当にこの地域がいいというのは、特産品がしっかりあったり、年中物が採れる。私食いしん坊なんですけれども、おいしいものがすごくあって、自分の地元いわき市は冬にな

るとどうしても寒くて採れないんですが、こちらは年中採れますし、すごく皆さん豊かに生活されているなと思います。

私はこの森町が好きですし、そのほかの活動としても、自分たちが古い建物が好きだということもありまして、今「町並みと蔵展」という森町の古い町並みが残っているエリアを皆さんに紹介させていただくイベントの実行委員をさせていただいています。

小京都という名前にふさわしく、お蔵なども50軒近くまだ残ってまして、そういうまちを巡りながら森町の歴史について紹介させていただいたり、物産を買っていただいたりするイベントが11月の24、25日に行われますので、ぜひ足を運んでみてください。

あともう1つ活動させていただいているのが、私が住んでいるのは、森町のさらに中山間地の方になるんですけれども、こちらの方でグリーンツーリズム研究会という会に参加させていただきまして、そこで「ぷぷぷの日」というイベントを年に2回やっています。

これは地元の方たちが自分のおうちや縁側を開放して、来てくださった方にその地域について知っていただくというイベントなんですけれども、毎回それを楽しみに遠方から、愛知県とかから来てくださる方がいらっしゃって、森町はいいね、こういうゆっくりして、お茶の香りがしたり、紅葉がすごくきれいな時なので、11月の10、11日でやるんですけれども、そのときにちょうど紅葉真っ盛りなので、こういうところっていいですねなんて言うてくださるとすごい嬉しいです。

その中で、このグリーンツーリズム研究会をもっと発展させていこうということで、民泊について今勉強会をしています。森町は、先ほど知事もおっしゃっていましたが、宿泊場所がすごく少ないということなので、せっかく来ていただいても、なかなか長く滞在していただけないということでしたので、私たちも少しずつですが、自分たちの家や空き家などを開放して、皆様にゆっくり森町を楽しんでいただけるような活動を続けていこうと思っております。

ということで、以上で、すみません、長く話してしまいましたけれども、こういう活動をしている私たちがいますので、ぜひ知事の方でも私たちの活動を支援していただくようなことをよろしく願いいたします。

【発言者4】 袋井市スポーツ協会の発言者4と申します。よろしく願いいたします。座らせて続けさせていただきたいと思います。

先ほど私紹介していただきまして、スポーツ協会の方のラグビーをやっているとい

うことで紹介していただきました。皆さんの中でタグラグビーというのを知っている方ってどれぐらいいらっしゃいますでしょうか。また、ラグビーって見たことある人ってどれだけいますでしょうか。ありがとうございます。

御存知のとおり、来年2019年、ラグビーワールドカップがございまして。その中の1つとして会場が、ここ静岡県の袋井にあるエコパスタジアムで行われます。それで、まちを盛り上げようということで、タグラグビーのチームを結成しました。

経緯を話しますと、私こういう体をしていまして、「ラグビーやっていたの?」とよく聞かれます。すみません、未経験者です。未経験者なんですけれども、ラグビーがちょうど年代的にいいか悪いかわからないんですけれども、「スクールウォーズ」というドラマがございました。それを見て、ラグビーがいいなと思っておりました。私自身、柔道をやっていたんですけれども、ラグビーに機会があれば携わりたいなと思っていました。

そんな中で、来年のワールドカップと合わせて、実は自分の子どもが男の子2人いるんですけれども、隣の磐田市でやっていますヤマハ発動機のラグビースクールに入らせていただきまして、ラグビーに携わらせてもらうことになりました。

そんな中で、来年、先ほどから何回も言っていますけれども、ワールドカップが来る、楽しみだなと思っているところ、御縁がありまして、今年4月から袋井市のスポーツ協会の方に入らせていただきまして、そしてその中でワールドカップを盛り上げようということで、ラグビー推進委員というものをスポーツ協会で立ち上げまして、その責任者として私任命されて今に至っております。

さて、そんな中で何をやろうと思っていたところで、袋井市のスポーツ推進課さんの方からタグラグビーの交流事業があるということの誘いがございました。お手元の資料あるかと思うんですけれども、釜石市の鶴住居復興スタジアムのオープニングイベント、こちらのイベントに招待していただきました。こちら、御存知のとおり、3.11のときに大きな被害があったところです。このスタジアムも、元々小学校があった所なんですけれども、それが無くなって今回ワールドカップをやろうということでスタジアムをつくったと聞いております。

そのようなところと、袋井市とたまたま釜石市が交流があるということで、この釜石市、新日鐵住金がありまして、その所長さんが袋井市の村松出身でいらっしゃいます。聞いたことがある方もいらっしゃると思うんですけれども、その中で商工会議所さん同士でつな

がりがあるということで、袋井市の商工会議所の事業費をいただいて、今回スポーツ協会が主体となってタグラグビーチームを結成させてもらって行っております。

そんな中で、タグラグビーといいますと、普通のラグビーはぶつかり合ってやるんですけども、このタグラグビーは、ぶつかり合うタックルのかわりに腰のところに布を出して、タグをぶら下げています。それを取ったことによってタックルのかわりにするという事でタグラグビーという形でやっております。

それで、じゃせっかくだから、前後して申し訳ないんですけども、ワールドカップを盛り上げていく、ラグビーもどんどん普及していこうということで、袋井市のスポーツ協会でタグラグビーチームを結成して、市のスポーツ推進課さんに協力していただいて、「広報ふくろい」に人数を募りました。

ところが、全部で10名集めようということで募集をかけたんですけども、以前のイギリスのワールドカップを踏まえて、五郎丸さん人気もあつたものですから、すぐ集まるのかなと思ったら、ふたを開けてみたら、何と最初3人でした。その中にうちの子どもも2人入っております。3人という話でしたが、そのうちぽっぽと入って5人という形になりました。でもこの5人、蓋を開けてみますと、ヤマハラグビースクールの経験者なんですね。

人数10名ということで、内訳の方に6年生3名、5年生4名、4年生1名、3年生1名、1年生1名ということで書いてあります。いろいろと話があっちへ行ったり、こっちへ行ったりしちゃうんですけども、最初3年生以上で募集をかけさせてもらったんですけども、全然集まらなかったんです。先ほど言った5名ですね。全部で10名になったんですけども、未経験者、それでも5名、半分です。集まっていたという形になっております。

それでスタートして始めた訳なんですけれども、最初の練習を6月に始めまして、本番が8月19日ということなので、そんなに日がなく、4回ぐらい練習させていただきました。暑い中、本当に熱中症にかかるかなと思いながら心配したんですけども、やはり子ども元気なんですね。暑さを乗り越えて楽しく練習をしていただきました。そのときのコーチも今後ろにいるんですけども、スポーツ推進課の方にコーチをしていただいていただきました。本当は私なんかも教えられるといいんですけども、未経験なので一緒に練習をさせていただきながらやっていったんですけども、本当に助かっております。

そんな中で、8月18日に移動しまして、最初に鶴住居の視察ということで、大槌町の震

災のところに行きまして、いろいろと見学をさせていただきました。この子どもたち、上が小学校6年生なので、3.11の大震災があったのが7年前で5歳のときです。ですので本当に何もわからない状態だと思います。わかっている、何だろうという感じだったと思います。

その中でこの場所に連れて行って、写真にあるんですけども、全体のところがこんなふうになって被害があったんだよというところでありまして、実際その流れた役場を見せていただきました。

そこで、やっぱり印象がすごい深かったのか、資料の下にも感想が、それをまた見ていただければいいと思うんですけども、やはりこんなに被害が大きかったんだという感想をいただきました。

その後、19日に試合本番を迎えまして、そこで交流をさせていただきました。本当に何もない会場です。周りは山と海、それで席も本当に6,000人ぐらいですかね、実際は。ワールドカップのときにはさらに仮設の椅子を設置して1万人強入れるというところですよ。

その中で集まってやらせてもらったんですけども、こののまちに行ったときにも、本当にラグビー熱というのはすごいなと思いました。地元の人にお話を聞かせてもらったときに、いつまでも過去のことを振り返っても仕様がな。これから前を見ていくんだと。そのときの象徴としてこのラグビーというのは、私たちの力になるんだというようなお話もいただきました。

そのときに、それを聞いたときに、いいなと、ラグビーの言葉でワン・フォー・オール、オール・フォー・ワン、一人はみんなのために、みんなは一人のためにという言葉があります。まさしくそのとおりでいっているなと。

その中で子どもたち、本当にわかると言っはいけないんですけども、にわか結成したチームで楽しんで交流を結んでやってきてくれたなと思っております。

これからもこういったところで、せつかくこのワールドカップ、静岡に来て、そしてそののまちである袋井市、ラグビーをもっと盛り上げていけたらなと思っております。

この中で、すみません、長くなっちゃっているんですけども、やはりスポーツというのが全体的にそうなんですけれども、やはり発信力が一番あるのかなと思っております。世界から見ても日本といたら静岡だね、静岡といたら袋井だよねと言われるようになればなと思っております。

それで、オリンピックのときもアイルランドのチームが1カ国まとめて袋井市にキャン

プを張ってくれるという話で、これも非常に嬉しく思います。その中でも子どもたち、ラグビーではなく、子どもたちもせつかく1つの国の代表が来てくれるんだから、交流とかそういったものを作っていければなと思っております。

その中で、知事にはもっとお願いしたいことがありまして、このワールドカップ、他のところに比べるとちょっと盛り上がりが出ていないかなと思っております。その中で静岡県、そして袋井市、森町、西部近郊を巻き込んで、大きく1つの事業のイベントとしてやっていていただきたいなと思っております。

それで、前までは「野球王国静岡」、それで今ちょっと低迷している「サッカー王国静岡」、そしてもう1つ「ラグビー王国静岡」ということで、全国に向けてラグビーと言えば静岡じゃないかというふうなところで、全体的につくっていただけたらなと思います。

そしてこのラグビー、くどいようですけれども、チームで動きます。本当に子どもの教育にも非常に役に立つのではないかなと思っております。一人一人いろいろと役割を持っています。その自分の役割をこなすことで、いろいろとチーム、学校生活とか、これから社会に出ていく中で、非常に役に立つのではないかなと思います。

そういったところでもう1つ、教育というか、体育の授業の中で、このラグビーというものを入れていただければ、もっともっと普及するのではないかなと思っております。

すみません、ちょっと拙い説明でございますけれども、よろしく願いいたします。ありがとうございました。

【川勝知事】 発言者3さんもいわき市からこっちに来られて、森町の方たちの温かさに触れて、こちらに移住をするようにお決めになったということでありありがとうございます。森町というのは本当に人を惹きつけるんですね、嬉しいですよ。

森町のような小さなまちをどういうふうに思うかという御質問があったんですが、今静岡県には35の市町があります。そのうち12が町で、残り23が市ですね。そのうちの2つが政令市ということで、どちらかというとき大きくなる方がいいという時期が、平成の合併のころだったと思いますけれども、ありました。一番静岡県で大きいのは浜松市と静岡市であります。

今子どもたちを安心して育てられるように、医療費を高校生まで無料にできないかなというふうに思っていて、その根拠は、今年の6月に選挙があったんですけれども、それ以

前にもう既に6つの市町で高校生を無料にしていたんですよ。県の補助は全くありません。そして、でこぼこがある訳ですね。高校生で医療費をもらえるまちと、そうでないところがあるので、何とかいい方にそろえたいということで訴えましたところ、あっという間にその数が11になりました。そしてその後、県の方でぜひこれを全市町に広げようということになりましたところ、今33の市町がそれに賛同していただいているということなんですね。

ところが、政令市の方は県と同じ権限があります。財源もあるんですよ。例えばインフラ整備というのがありますが、毎年1,000億ぐらいかかる。政令市の前は、それを全部上手に配分していた訳です。そのうち200億円が毎年政令市にいきます、1つですよ。合計400億円いく訳です。大変なお金が政令市に流れて、権限も流れるということで、そういうところにはお頼みする以外にない訳で、何とか協力してくれないかと、そういう状況になって、大きいことがいいことだという時代じゃなくなっただけじゃないでしょうか。

スモール・イズ・ビューティフルというかつてそういう言葉がありましたけれども、森町のように、あるいはほかにもすばらしい町が11ございまして、町村会の首長先生と会食することがありますけれども、非常に個性がはっきりしているので、合併も一概に全部よかったとは思えないと。

例えばあえて名前を挙げますと、藤枝というところは岡部と一緒にになりましたね。藤枝の市長さんは、その岡部をものすごく大切にされました。だから岡部の人たちは合併してよかったと思っている。そういうのは例外です。

ですから大きければいいというものではないと。一番大きいのが東京です。その東京は3.11のときに御主人と連絡がとれなくなって、こんなことでいいのかということで、それが大きなきっかけになって、目に見えるというか、常にコミュニティの中で連絡がとれるような、そして人々が温かく迎えてくださるような、そういう森町に移住することに決めたというのが発言者3さんのお話でございまして、私は東京のようなところが本当に終の棲家としていいのかということで、私たちは「30になったら静岡県」という言い方をしております。

それは、大学に行った場合には22、3歳で卒業します。それから友達が行っているような大きな会社に就職する。やがて30歳前後になると、いいパートナーを見つけて、これから世帯を持つというそういう年齢になりますね。そのときにお父さん、お母さんのことを考えます。おじいちゃんはお亡くなっちゃった、お父さん、お母さんどうするかなど。それ

からまたお墓はどうするかとか、そして仮に結婚して、一緒に世帯を構えるのに、東京ですとマンションを買わざるを得ません。

だけど、それは何千万としますから、キャッシュで買えないので、ローンを組まざるを得ない。そしてそのローンを返すために2人とも働かざるを得ない。そして20年、あるいはそれ以上のローンを組んだら、その間、そこから離れられないです。2人とも働いているから、子どもは1人以上をなかなか産み育てるのは大変ということになるから、果たしてこれでいいかというふうなことを考えるときに30歳前後だということ、そのときにこちらで仕事がありますよということで、静岡県出身者がいる大学、今22ですかね、この2年ほどでいろいろな静岡の情報を出しまして、静岡以外の方にも見ていただけるようにして、帰っていただくようにして、そしたら去年、東京からこっちに帰ってこられる人で、70%が40歳以下になりました。

我々も終の棲家として帰ってこられればと最初思っていたんですけども、だからこういう発言者3さんのような人が、これから増えてくると思いますね。ここだと安心して顔の見えるところで子育てもできると。そして家のことについても心配ないし、おいしい食べ物もあると。

たまたまいわき市と比べられましたけれども、農産物だけで339ありますから、第2位は158しかありませんので、うちはダントツで多い。しかも海の幸もありますから、それを入れると439でダントツで1位です。ですから、春夏秋冬、いつでもその旬のものがいただけると。そしてしかも和食というのは旬のものを大事にします。それが世界の無形文化遺産になりましたから、これは静岡県のためになったようなものですよ。

ですからそういう食の都で、豊かな景観があるところということになると、ここだと。だから私は、遠いビジョンをどう考えるかとおっしゃったので、東京時代の次、すなわち明治から150年たちまして、1868年に明治維新です。今年2018年、ちょうど150年目ですね。ですから東京とは違う生き方をこれから考えていったらどうかと、その選ばれる場所として関西や東京というかつて首都があったところですね、京都とか東京、そのちょうど真ん中にありますし、交通の便もいいし、飛行場もある、港もある、新幹線も走っている、高規格道路もある。

そして周りは豊かな自然に恵まれていると、そういうところなので、ここがポスト東京時代のフロントランナーになれるんじゃないかと、そういうビジョンを持っておりまして、その独立宣言は「ふじのくに」をつくる。富士山のように美しく気高い、そして立派な

人が士ですね、それを富が支えている。富は立派な人をつくるために使う。「富」と「士」というのはそういう字を当てているじゃないですか。「士」というのは一書いて十な訳ですから、一から十までやって、また一に戻るといふ立派な人間のことですね。

だから、大学出たら学士とか修士だとか博士だとか、全部「士」を書きます。そういう人間が富を支え、その富を人間をつくるために使う、こういう地域をつくっていかうと。また富士山は非常に美しいですけども、いつ爆発するかわからない。だから自然に対する畏敬の念を失わないでおこうと。富士山はどこから見ても美しい、平和な調和した世界をつくっていかう。

四季折々、冠雪しました、秋が来た、冬が来るといふことで、いわば自然の气象台みたいなものですから、四季折々の変化を大切にしましょう。富士山の雪はあれは水ですから、太陽がよく当たる。そうするとそこに植物が、花が咲き、そして実が実る、だから四季折々、四季を大切に四季折々のまた恵みも大切にしよう。

富士というのは、その字のごとき、字には意味があります。かつては幸福の福と慈しみという字を当てたんですね。一番最初に幸福の「福」と「慈」といふ漢字を日本人は当てました。これは『常陸国風土記』に出てくるんですね。筑波山と富士山を比べて、「福慈」といふ字で出てくる。

それから不死の薬の「不死」、何となく不老長寿のイメージがあると。それから二つとならずといふことでオンリーワン、「不二」といふ字を当てられたこともある。今は今のよふな字を当てている。いろんな思いを富士山に託してきた訳ですね。そういうよふなものを託せるよふに我々はひらがなで書いていますけれども、そういう地域をつくっていく。

たまたま2月23日、富士山建国記念日にしております。知っています？それは来年、新天皇になられる方のお誕生日ですね。新天皇になられる浩宮様は、40歳になられたときに、1960年生まれですから2000年のとき、毎日新聞のインタビューに答えて、「自分の誕生日を富士山の日だといふてくれる人がいて、嬉しゅうございます」と、そう答えられているんですよ。自分は富士山の日に生まれたと思っいていらっしゃるんです。それを我々富士山の日と決めている訳です。

そしたら、山梨県も一緒にお祝いしましょうといふことで、毎年富士山の日をお祝いしている。日本のシンボルでもあります、そういう地域をつくっていかうと、こういうビジョンを持っております。

ともあれ、発言者3さんが静岡県の農業を褒めてくださいました。すぐ近くに農林大学

校がありますね。その格を上げ、文字どおりの大学にします。来年の4月1日から4年生の大学にします。

それから、普通高校も大事ですけども、農業高等学校とか、工業高等学校とか、商業高等学校だとか、工業専門校だとか、農業専門校だとか、いわば実学ですね。発言者4さんはスポーツのことを言われましたけれども、スポーツ、芸術、体で身につけるもの、これを実学といいまして、英数国理社、これはもちろん大切なんですけれども、いわゆる実学、これを大事にしようということで、そういう高校にだけ知事賞を出しています。実学のところにしか出さない。はっきりしているんです。

そういうことで、そしてこちらのトウモロコシを見てもそうでしょう、次郎柿見てもそうじゃないですか。ともかく品質が高いんですよ、おいしいんです。安心して食べられる、安全なんですね。こういうものがある訳ですから、これは芸術品です。だから農産物じゃない、農業芸術品だ。工芸品という言葉があるように、農業芸術品を約めて農芸品。農芸品は品質が高いので、ゼロが1つついて高く売れる。安売りをしない、高く売っていく。よろしく。

それで、高くても買う人たちがたくさんいますから、そういうものを買いにいらっしゃい。もし本当にやりたいなら、ここで借りてやればよろしいと。ですから、つくって、そしてサラリーマンしながら、土地を借りて小作をする、サラリーマン小作をすればいいというぐらい、これからは農業で自立できなくても、例えば御主人がコーヒーで稼いでいらっしゃって、農業でも稼いでいるみたいですけども、稼いでなくても、真似事から始めていって、子どもたちが好きになるように、そういうふうにしていきたい。

第2種兼業農家の向こうにあるのがサラリーマン小作です。ここからだんだん、だんだん専業農家にして、サラリーマンの人が小作をやって、そしてやがて売れるようなものをつくっていくような道を反転させていきたい、こんな考えを持っております。

それから、発言者4さんはラグビーに入れ上げていますね。こういう人がいることが大事なんです。それでラグビーのことをお話してくださいました。実は先ほど言いました「地域自立のための『人づくり・学校づくり』実践委員会」、ここに実は清宮さん入ってもらっているんですよ。

清宮さんが、ラグビーのルールをほとんど知らない、サッカーのように簡単ではないので。それでラグビーに関心のある学校、それから学年、小学校5年から中学1年、2年ぐらいのところで、ラグビーの教則本をつくって、うちのメンバーが教えに行く、かつ学

校の先生にも教えられるようなガイドブックもつくと。これは実践委員会で、それやれやれと言われて、それで教育委員会と一緒にやる総合教育会議というのがあるんですが、そこに持っていったら、それはいいですね、来年せつかく静岡県で、恐らく一生に1回しか見られないであろうと。

エコパでいわゆるワールドカップですね、これがあるので、この熱が熱いときにちゃんとルールを教えて、本物を見せるような、そういうものがあつたらいいということで、教則本をつくる予算をこの9月予算に出しましたら、全会一致で認めていただきました。ですからラグビーに対するファンが増えるように、まずはきっちりと裾野を広げると、こういうことで御期待に添いたいと思います。

うちはスポーツ王国ということで、ラグビー王国はこれからですけれども、サッカー王国とか野球王国とかいうことであります。野球場も草薙があります。その草薙が古くなったので、これをやりかえるときに、プロの人たちが使えるようにしようと思って、3万人の球場をつくろうと思ったんですよ。

ところが、3万人の球場というとすごく値段がかかるということと、楽天の球場が2万2千人なんです。とりあえず2万2千人の球場で、そこでプロ野球の球団が来て、それで日本シリーズやるとなったら、ホームグラウンドは3万人ないと来てくれないんです。だからもしプロ野球で勝ち進んでいったら、ぱっと3万人の観客席ができるように設計したんです。

そしたら、日本ハムとか札幌でしょう、冬寒いんですよ。だからうちがそこに来たいとか、それから楽天、特にマー君がいたときです。マー君のサイン入りのグラブをくれたり、それからヤクルト、東京六大学のときにはそこで野球できないでしょう。そこから来てくれたり、ものすごいラブコールがあつたんですよ。やっぱり太平洋側の真ん中ですから。

ところが、ちょっと考え直したら、あそこは野球の聖地なんですね。ベーブ・ルースと沢村投手が投げ合って、そこをある特定の球団のためにだけつくる訳にはいかんということを指摘され、なるほどそのとおりだと思って、その話をやめにしました。

ところが、うちに対する関心があるということはそのとおりなんです。どこに野球場をつくろうかと。今、発言者4さんが野球場とかと言われたでしょう。袋井のエコパに野球場をつくれるかなと思って、ちょっと絵をかいてみるとつくれるんです。ところが、エコパは、あれ森の中にあるんですよ。いろんなグラウンドもつくっています。エコロジーのエコですね。生態、生きているものがたくさん棲んでいるところ、そういう中で健康を増

進するためのスタジアムでありグラウンドであると。だから森には保安林の指定もかかっておりまして、あれを崩したらエコパでなくなります。

ですから、今別のところで考えておりますが、そこはプロが来ますよ、きっと。私どもが金を出さなくても、寒いところとか、遠いところとか、うちが使わせてくれるならやらしてくれないかといった、そういうようなことを考えておりまして、エコパはちょっと野球場は、後樂園球場のようなものをつくれれば、森がものすごく破壊されますから、それはちょっとできかねるというところがありますが、スポーツ王国をどうつくるかということは考えていい時期がきた。

ラグビーについては、教則本のようなものをつくりながら、実戦を観て、ラグーマンが育つ。ラグビーというのは、名前の由来はラグビーという学校の名前です。

そこでサッカーをやっていたときに、1人の男の子がボールを持って走った訳です。そこからこのラグビーというのがスタートして、今のルールになった訳です。非常に頭のいい子たちがやって、ルールがものすごく複雑ですよ。だけど、それジェントルマンのスポーツなんですよ。

だから発言者4さんがおっしゃったように、オール・フォー・ワン、ワン・フォー・オール、そして試合がものすごく激しくなっても、終わったらノーサイドで、お互いの健闘をたたえ合う。これは武士道と適うところがあるんですよ。

ですから、発言者4さんが熱く言われましたように、これは教えるに値するものだというふうにも思っております、せつかくの機会ですから、希望する小学校の5年生ぐらいを抱えていらっしゃる小学校、あるいは中学1年生ぐらいの子どもたち、そういうところに来年の4月ぐらいから一気にファンを増やしていく、そういうふうにしたいと思っております。以上であります。

【発言者5】 こんにちは。NPO法人ブライツの発言者5と申します。よろしくお願ひいたします。

発言者4さん、私たちNPOブライツのメンバーにラグビー推進課の子がいます、メンバーみんなで一緒にラグビーを楽しませていただいております。もし協力できることがありましたら、また御連絡ください。よろしくお願ひします。

私たちブライツは、袋井市PTA連絡協議会のメンバーを中心に立ち上がりまして、今

年で15年目になります。ブライツでは2つの事業、まち親プロジェクトと地域医療を守る活動を通して、高齢化社会でもありますから、助け合えるまちづくりを目指しております。

1つ目のまち親プロジェクトですが、小学生の5、6年生を対象に学習支援をしております。今年の夏から中学生の学習支援もスタートしました。現在、子どもたちを取り巻く環境はとても多様化しています。夜お母さんが働いていたりとか、朝昼がめちゃくちゃになっている子どもたちもすごく多いですね。そんな中、まちの大人の人たちが、自分ができることで子どもたちに関わっていくということがとても大切だと感じています。

ブライツ設立当初は、親から虐待を受けた子や、不良の子どもたちの問題に取り組んでおりまして、そのときに本当に殴られて、私もあばら骨を折ったようなこともありました。でもそういった大変な環境から子どもたちが抜け出すには、親は結構変わらないし、環境も変わらないので、抜け出すには、子どもたちが自分で力を蓄えていくしかないということを学びました。

その力というのが基礎学力を付けることだということを知りました。その基礎学力をとにかくつけて、そこのそういう連鎖から自分の人生を歩んでもらいたいというので、学習支援をしています。「あっわかった」と輝いた子どもたちのそういった笑顔を見るのが、私たちブライツのみんなの原動力になっております。

本日お配りしたまち親プロジェクトのチラシがあると思うんですけども、本当に今までに困っている子どもたちが身近に、もう貧困も含めていっぱいいます。いろんな関わり合いとかがございますので、何といたしますか、おらがまちの子どもを育てたいと思う方がいらっしゃいましたら、ぜひ御参加の方をよろしく申し上げます。お待ち申し上げます。

2つ目の地域医療を守る活動ですが、静岡県は全国でもお医者さんがとても少ないのです。さまざまな理由がありますが、それはちょっと横に置いておいて、地域医療は安心してこのまちで暮らすためには、本当に欠かせないものです。

現在、病院のお医者さんや、看護婦さんなどの医療従事者は過酷な激務にさらされて仕事をしておられます。私たちも最初全然知らなかったんですけども、それを学んで、こんなにお医者さん少ないんだ、こんなに看護婦さんも大変なんだ、それはもう看護婦さんやる人ないよね、お医者やる人はありますが、都会に行ってしまう、田舎にはやっぱり来たくないよねという現状があります。

そこで、私たちブライツはいつも自分たちがとにかく、誰のためでもなく、自分たちが

できることをしようというメンバーの集まりですので、1つ、かかりつけ医を持ちましょう、2つ、コンビニ受診を控えましょう、3つ、救急車はこんなときに呼びましょう、4つ、医療関係者にも感謝の気持ちを伝えましょう、5つ、助け合いましょうと、皆さんに呼びかけております。

また、浜松医科大学の地域医療学講座や近隣の市町村の団体と連携し、年2回のシンポジウムをさせていただいております。

それから、病院は、こう言っては何ですが、あの先生偉そうで、なかなか皆さん病院に行ったときに、忙しそうだし、怖そうだし、なかなか質問できないという患者さんはいっぱいいらっしゃると思うんですけども、そういった方々のために、まちのお医者さんと語るという座談会もやっております。

本当に近隣のところでは、森町で、森町病院友の会さんなんかにもお世話になりながら、一緒に連携を深めていただいております。ありがとうございます

そして、シンポジウムの住民アンケートの結果から、医療制度を知らないことで問題が大きくなるケースが多いということを知ることができました。私、たまたまウェブ関係の仕事をしておりますので、会社で「安心ポケットガイド」という行政のつくったサイトは、厚生労働省は何を言っているのかわからないというのが現状なので、中学生にもわかりやすいように言葉をかえて作成しております。まだ途中で、いろいろ載せなきゃいけないことはあるんですけども、ぜひ皆さん、困る前に、パソコンかスマートフォンで御覧になってください。ここの最後にありますので、そこを見ていただきましたらわかります。

さて、市民活動にはどうしても最低限のお金がかかってまいります。最初は市の協働まちづくり事業なんか補助金申請を出して、県にもお世話になって出させていただきましたが、今現在では事業趣旨に賛同して、活動費を寄付してくださるまちのお医者さんなんかも出てまいりました。

年とともに、15年もやっておりますと、行政職員や社協の職員、教員、会社勤めの方、退職された方など、さまざまな立場の住民の方々が、ボランティアで子どもたちを助けてくれたり、あと地域医療の自分たちのために、医療費はこういうところが軽減できるというのを、皆さん伝えてくださっております。

加えて、袋井市学校教育課や、袋井市の地域医療推進課に本当にお世話になっております。行政の専門性によるサポートがあるからこそ、1足す1で3の成果があるんだというのを市民としては実感しております。

だからといって行政の言っていることをちゃんと聞いている私たちではないのですが、実質的に自分たちが決めたことを貫き通しているんですけども、その中でデータの情報であったり、方向性であったり、ともに協働できるところを本当にサポートしていただいております。多くの方に支えられて活動を進められていることは、本当に感謝しております。ありがとうございます。

活動を通してわかったことは、今まではどっちかというところ、行政に対してはとても厳しい住民だったのです、私。ところが10年間、そういう活動に携わっておりますと、学校の先生も本当に一生懸命、医療従事者も必死で頑張っています。行政も本当に、メンバーにいますから、どれだけハードで頑張っているかというのがわかってきました。なのに問題は増えていくばかりです。

世界で類を見ない高齢化社会を迎えた日本では、住民が協力し合うことは一番大切だと考えています。そこでなんです、多くの県民が活躍の場となる団体と出会えるように、またそうした団体の発掘とクローズアップをぜひ県にお願い申し上げたいと思っております。以上です。

【発言者6】 こんにちは。森町で和菓子屋を営んでいます発言者6と申します。よろしく申し上げます。

個人の活動内容としまして、高校生への職業体験、そして講師、お菓子屋になる道筋みたいな感じを年2回行っております。

あとは老人ホームでの上生菓子、和菓子、お茶会に出るようなお菓子を老人の皆さんと1時間ぐらいですが、体験に行くんですけども、またそれも自分の中では、発想が豊かで勉強になって楽しくて行っています。

あと、小学生もそうですけれども、発想がすごい、考えられないようなものをつくりますので、自分としても勉強になっています。

あと、今、森町の菓子組合の会長をやっていますけれども、事業としましては、森町らしさをアピールするために、町内での外販や、あと県外の方にも外販に行かせてもらっています。

あと、自分の目標、また取り組みについては、森町では、メロン、栗、柿、トウモロコシなど、いっぱい食材がありますので、和菓子、洋菓子など、いろいろその食材を使って

お菓子に活用できたらいいなと思ひまして、今は栗蒸し羊羹などをつくっております、自分のこだわりとしては、森町産の栗のみを使って、栗練羊羹をつくっています。

また、県の方では平成22年ふじのくに新商品セレクション、第1回ですけれども、そのときに森町のクラウンメロンを使いまして、金賞をいただきました。あのとき初めてもらいまして、感動しました。

森町の食材に関してもっとアピールできたら、僕も県外に出てアピールしていきたいなと思っています。

森町が大好きなので、これからも食に関して、県の方の事業があれば参加したいなと思いますので、よろしくお願ひします。以上です。

【川勝知事】 どうも発言者5さん、ありがとうございます。いい仕事を15年間も続けてこられまして、確かに静岡県は10万人当たりのお医者様の数が、一時期47都道府県中44位だったんですね。今は40位ぐらいまで、それでもやっぱり少ないんですよ。で、浜松医大しか医科系のものがございませぬし、それで私は何とか文科省、厚労省に働きかけてやっていたんですけれども、医師会の反対もあります。それから各県の競争があります。なかなか難しいということで、どうしようかということで、バーチャル・メディカル・カレッジというのを立ち上げたんですよ。

横文字だからわかりにくいでしょう。わかりにくくて申し訳ありませんが、バーチャルですから、実際の校舎はないんですよ。仮想空間ですね。メディカル、医療、カレッジ、大学なんです。学長に本庶佑先生、ノーベル賞取られたでしょう、あの方をお招きして、ついこの間まで県立大学の理事長をしていただいていたんですが、その人の話が聞けませぬよと。

条件は6年間、実はメディカルドクターになるのに、大学は通常4年ですけれども、医学部は6年行かなくちゃいけません。6年間奨学金を差上げると。その1.5倍、9年間は静岡県で働いてくださいと。だから仮に24、5歳でメディカルドクターになった。いよいよお医者さんの卵になって、それから34、5歳までこちらで働いてくださいと、それが条件なんです。

奨学金を差上げるとのことだけなんです。それはあちこちでやっているんですが、これをバーチャル・メディカル・カレッジ、学長本庶佑で始めて、そしてサマーセミナーでは本庶先生のお話を聞けると、やってもらっている訳です。そしたら、北は北海道大学

から東大とか京大とか九州から、定員は最初は、どこでも奨学金は出しているんですけども、20~30人だった。私はそれを100人に増やし、医科歯科大学の定員が110名になったら110名に増やし、年間ですね、今120名。そしてもう7年8年やっていますから、卒業生が出てきました。今何人ぐらい働いているかな、400人近く働いています。

だから全国でお医者さんを教育していただいて、成果だけいただく。毎年120人に差し上げている訳です。その人たちが卒業していきます。中にはパーンと奨学金を返す人もいます。ですから、数十人ぐらい、毎年増えていっているんですよ。

仮にこちらに医科系大学をつくるとするじゃないですか。土地を取得するだけで、もう何十億、それから校舎を建てるのに100億単位のお金がかかります。それから機械を入れなくちゃいけない、病院もつくらなくちゃいけない、医科大学は大学病院をつくらないといけない。それから先生を呼ばなくちゃいけない。最低でも10年ぐらいかかるんですよ。だから全体で1,000億ぐらいかかる訳です。

ところが今ほとんどただみたいな形でやって、ただし、まだ、数は増えているんですけども、例えば周産期医療だとか、あるいは小児科だとか、足りないところもあります。それから地域によってでこぼこがあるんですね。今専門医という制度も導入されて、なかなかいろいろ考えなくちゃいけないことがありますけれども、お医者さんの絶対数は増えている。

それからもう1つは、なるべく病気にかからないようにしようということで、これは健康寿命を伸ばすということですね。森町に住めばいいということです、結論は。それはどうということかという、食事に気をつける。それから軽い運動を継続する。農業がそれになりますよね。それから社会参加、つまりこういう平太さんと語ろうという広聴会に出てくる、こういう社会参加をする。そういう3つをやっている方、食事に気をつける、軽い運動を継続する、それから引っ込み思案にならない、社会参加する。この3つをやっている人が実は健康寿命が高いんです。

これをたまたま我々は10万人ぐらいの人たちに調査していた訳です、それが日本でトップになりましたから、健康寿命が。厚労省がその原因を聞いてきた、それを調査していた訳です。それで金賞をくれましたよ。ですから我々のやっていることがモデルになっている訳です。

それで今、県立の総合病院のところにリサーチセンターというのを作りまして、健康になるためのリサーチの研究をしてもらっています。研究をしていると、だんだん教育を

やってくれと文科省から言ってきますよ、立派な研究所をつくっていけば。そういうふうにしてお医者様を増やす努力をしているんですけども、しかし一番肝心なのは、実は発言者5さんがおっしゃったように、かかりつけ医、地域の中で家族のことも御存知、家族の健康状態のことも御存知、そういうかかりつけ医というものを持つことが大切だということですね。

これは地域包括ケアということで、それを今県の方もやっておりますけれども、その先駆的な試みを発言者5さんがなさってこられたということで、それを今制度的にやっているということです。救急車をタクシーがわりに使うなんてのもってのほかですね。それから先生が本当に忙しくていらっしゃるということも、実はそういう認識を持たれているとおりであります。

そういう訳で、なるべく先生の、つまり病院の負担を軽くしつつ、自分たちの通常の病気やけがなんかについてはかかりつけ医にお世話になるという、そういうシステムを今つくりつつあります。森町がそのモデルになっていただければというふうに思います。

それから、まち親プロジェクトとおっしゃっていますが、まちの子どもの方々にとって、すべての大人たちが親になろうという、つまりまちの子はまちの大人が育てようというそういう考え方ですね。ですから先生の御負担をそれで下げると同時に、自分たちが生きてきたその経験をまちの子どもたちに伝える。それをどのようにすれば一番伝えやすいか。

言葉で言えば、社会総がかりとか、地域ぐるみと言えるんですけども、どのようにしたらいいかというのが、それぞれ工夫の要るところで、学校にすべての親が入っていく訳にもいかないし、そしてまた塾だなんとかといっても、子どももそれなりに忙しいし、そこらあたりの工夫が今求められているんですよ。ただ、学校の先生方の仕事を軽減するために、まちの人たちが加わらなければ、もう先生方もやっていけないという状況であることは間違いありません。

私なんか昭和23年生まれで、中学のときには17クラスで1クラス53名ですよ。そんなところでも別にこういうふうにいる訳です。先生も適当にやっていたと思うんですよ。ところが今先生は無茶苦茶忙しい。なぜ忙しくなったんでしょうか。それは文科省の指示がありまして、いろいろなことをさせられる訳です。だから子どもと接触する時間が限られてしまう。こういう負担を一種の制度的な締め付けによって先生方を忙しくさせているということがあります。

これはすぐには変えられないので、ですからまちぐるみで皆先生方を助けていく必要が

ある。言ってみれば、先生もまちの子どもの心を育ててくださる、それを地域包括的に一緒にやっていくという、だからこのまち親プロジェクトも、もう先駆的な試みだと思えますけれども、地域ぐるみ、社会総がかりのこれは教育への1つのモデルになっているんじゃないかと。そこで得られる知見を町や県で共有して行って、それぞれの個性に応じた形での教育にしていけばいいというふうに思っております。

それから最後の発言者6さん、お顔が幸せそうですね。つまりおいしいものをつくっておられるから、いいことをされて、人が幸せになる訳です。しかもこちらは舌が肥えていますよね、皆さん、おいしいものを食べてきた地域ですから。ですから、そこで和菓子で組合長をされているというんですから、だからもう本当においしいものに違いない訳ですよ。

それで、我々のところはたくさんの食材があるので、食材の中でも例えばメロンといっても、あちこちでつくっています。そのどこのメロンが一番いいかというので、それを農産物のブランド化ということで県が表彰している訳です。またそれを加工してつくる、これを新商品セレクション、新しい材料をつけて、こういうものはすごいですよと、これの第1回の金賞ですから、森町だから当然とはいえ、なった方ですね。

そして話がいいじゃないですか。小学生のところに体験学習でいろいろとやったら、子どもたちの発想が自分のためになるとおっしゃるんです。子どものためにやっていると思っていれば、子どもの発想が、いわば自分のいろいろなお菓子づくりに生きてくると。老人のホームに行ったら、その御老人といろいろとお話をする、それがためになるとおっしゃる訳ですね。だから子どもたちのために、市や県から頼まれて行ってやっているというんじゃないんですよ。行ったら、子どもの発想ってすごいなというふうにして、それを取り入れられているし、人は無駄に年をとっていないということを自ら言っているんですよ。

静岡県の人生区分というのは、高齢者という言葉を使わないのは御存知ですか。使っていないんですよ。高齢者は誰が使うかというと厚労省が使っている。65歳で高齢者って勝手に言うんですよ。けしからんと。さらに75歳以上になると後期高齢者というでしょう。もうけしからん。だんだん私たちは年をとって偉くなっていくという、敬老の精神というのはそういうものとして生きているはずだと、社会の中に。

それで、高齢者は誰が決めたかと聞いたら厚生省が昭和31年に決めているんです。まだ、発言者5さんも発言者6さんも生まれてないですよ。昭和31年ですから。でしょう。

そのときに世界保健機構というのが65歳を高齢者というふうにしたんです。それで、世界保健機構、国連の機構ですから、日本の厚生省は日本の寿命を見ると、女性が65ぐらいだったんです。男性がそれより低いんですね、60代だと。だから65歳をもって高齢者と決めたんです。十分に理由があるんです。

しかし昭和31年というのは1956年、今2018年ですから62年前ですよ。この60年間に平均寿命は男女ともに80以上になりました。20ぐらい上に上がっている訳です、世界トップですから。だからその65歳がもし平均寿命であると、今85歳でもってもし言うなら高齢者だということで、我々は17歳までが少年、18歳から青年になる、有権者になりますね。

青年会議所は40以下、商工会議所の青年部は大体45歳以下ですね。45ぐらいまでは青年です。46から青年から壮年になります。壮年になって、壮年が切れるのが、いわゆる健康寿命が女性76歳ですから、静岡県は、そこまでは壮年だと。その壮年が46から76までありますから、3つぐらいに区切って、前期、一番盛んな盛期、それから成熟するということで壮年期が76までです。そこまではみんなぴんぴんしているんです。

77になったら、申し訳ないですけども、少し自分のことを中心に考えていただきたい。老人の真似事をしていただきたい。77になったら喜寿でしょう。皆さんが祝ってくれる、それを断ってはいけません。思い切り祝ってもらおう。そしてそれならばちょっと仕事も休ませてもらおうと、ときどき助けに行くよということで、これで喜寿ですね。初老です。

それから80の傘寿になったら、堂々としてくる、中老みたいになってくる。それから88の米寿になってくると、これはもう長老です。大老といってもいいですね。だんだん偉くなっていく、これが人生だと。これが静岡県の人生区分。これは韓国語にも中国語にも英語にも訳してあります。

だからそういう長老のところに行ったら、こういう素直な心を持っている方は、学ぶことがあるに決まっているんですよ。ですからそれをおっしゃっている。だから言葉は少ないけれども、味わいのある、恐らく発言者6さんのお菓子のように味わい深い、一口食べただけでぱっとその味がある。

ちなみに和菓子は私の知っているところ、もちろんお茶菓子として最初生まれた訳ですけども、そのときに何を一体モデルにしたかという柿だそうですね。柿の甘みを、日本は昔は砂糖なんかありません。このいわゆる砂糖がつくれるようになりまして、和三盆ですね、高級品ですね。何を目的にしたか。柿の甘さです。

柿とミカンとどっちが甘いでしょう。柿ですね。柿の後にどんなに甘いミカンを食べても、酸っぱいですよ。ミカンの後に柿を食べると、特に次郎柿の熟したやつは、食べると甘くて、とてもおいしいと。それをどういうふうにしてお砂糖やいろんなものを混ぜてつくるかというのがお菓子だったそうです。

次郎柿、柿みたいなものを食べ慣れている人はわかる。次郎柿自体、もちろん後につくられた訳ですけれども、舌が肥えている訳ですね。ですからそういうことをされているのは、一番幸福な仕事なんじゃないかと。お話も幸福な感じで、最後、これからは菓子司をよろしくということで、広く幸福を菓子司から届けていただきたいと思います次第でございます。ありがとうございました。

【傍聴者1】 今日ありがとうございました。私は森町に住んでおります傍聴者1といえます。よろしく願いいたします。

県知事さんには今日来ていただいてありがとうございました。本当に、先ほどから聞いているんですけども、先ほど一番初めに発言者1さんの方から話があったんですけども、どうしても少子化というのは大きい問題だと思うんですけども、森町に来てもらうのはいいですけども、ほかの地域がまた人口が減って困るものですから、日本人の純血というか、日本人の人口を増やすことを考えることは難しいと思うものですから、そうするとどうしても今度は世界というか、異文化というか、海外からのいろんな血を入れるとか、そういうような文化も、日本人の発想とは違う新しい文化ができるんじゃないかなと思うんですけども、そうすると例えば、この間のテニスの大坂さんみたいに、すばらしいものができると思いますから、何か新しい方法として、国際交流とか、そういったものが静岡空港から来るとか、いろんな海外から人が来てもらって、日本に住んでもらうとか、日本に来て観光で帰るんじゃなくて、私も日本に住む、森町にも袋井にも住んでもらうとか、そういう方が増えてくれるととってもいいと思うんですけども、静岡県もぜひそういった活動をしてもらえればと思いますので、よろしく願いします。

【傍聴者2】 知事さんには本日御苦勞様でございます。私前回移動知事室のときに知事さんには森町病院、クリニックのそばで前町長と御挨拶いたしましたので、初めてお目にかかるような気がしておりません。

私自身は、平成14年、東京の文京区からこちらへ、私の家内がこちらなものですから、

移ってまいりました。知事さん同様、私も早稲田の出身でございますので、よろしく願いいたします。傍聴者2と申します。失礼いたしました。

平成17年から前町長の要請で観光大使を3年やっておりました。その間、遠州森駅の隣に観光案内所をオープンいたしました。それで現在に至っておりますが、その間、新東名が開通しまして、東部の方々も随分こちらへ新東名でお見えになって、森駅の駐車場にお止めになって、浜名湖の方に天浜線を利用してお出かけになる方も相当に増えてまいりました。

そこで、知事さん、今回おねだりというか、お願いなのですが、私が見ているところ、天浜線の車両が相当に老朽化してきております。天浜線、御存知のように、通勤通学の足であると同時に、沿線の観光の動脈でもあると思います。過日、天浜線の会合のときに、西部支援局長も同席されました。その節、その天浜線の車両の老朽化と同時に、できれば1両でも2両でもいいから、新しい観光の車両を何とかお願いできないかということをお提案申し上げまして、同席の方々の沿線自治体の方々の賛同もいただきました。

誠に唐突かと思いますが、できれば国が言っている地方創生、かけ声はよく聞こえてきますが、はっきり申し上げまして、実感がございません。そこで、この地方創生の1つになるかと思いますが、天浜線の新しい観光車両の導入をこの機会にぜひ知事さんをお願いしたいと思います。知事さん御存知の東門の反骨の精神、いまだに私持っております、その反骨の精神を共有する者として、ぜひよろしくお願いいたします。以上です。

【傍聴者3】 森町の傍聴者3と申します。平太さんと語ろうの会に参加するために、お若い方から話を聞いてまいりました。そして少子化になっておりますが、結婚して、子どもを産んで、今の状態ですと、「働かないなんて」というような目で見られちゃう。今女性参加とかなんとか言われておりますが、そういうふうに見られてしまって、働かざるを得ないような風潮というか、そういうのがとても気になる。お金がないのも気になりますけれども、そういう風潮が今ありますので、普通に子どもをお家にいて育てているというのも大切な仕事というか、大切なことで、サボっている訳ではないですが、仕事をしている方がとてもいいような風潮をととても感じると言われました。

実際、子どもを持って、仕事を持ちますと、子育てだけで、もうとても疲労困憊している上に、仕事を持ちますので、お母様自体もとても大変になります。そして子どももお母さんから離れて、預かったりしていただきますと、十分な愛情とか、心配なときとか、大

変で助けてもらいたいと思うときに、最愛のお母さんがそばにいないというのは、子どもにとってもとても悲しいことだと思いますので、こういう風潮というかは、どこから広報として出てくるものなのか、お聞きしたいなと思います。

【川勝知事】 どうも3人の方からすばらしい意見をいただいたと思います。

森町の傍聴者1さん、開かれたお気持ちをお持ちの方ですね。静岡県には8万6千人ぐらいの外国人の方が居住されています。そして留学生、これは日本全体ですけれども、毎年5千人ぐらいずつ増えて、今20数万人の留学生が来ているんですね。日本にあこがれて来ている。その昔、磐田だとか、浜松にブラジルからたくさんの方が来られて、この人たちは働くために来られて、そして子どもを連れてこられた方もいます。

そのうちの1人、10歳のときに出嫁ぎでお父さんとお母さんに連れられてきた子が、この間浜松にある文化芸術大学を卒業生総代で卒業しました。彼女は母国のブラジルのポルトガル語と日本語と、さらに英語もできて、自分が何か役に立ちたいということで、その両方の言葉が使える大会社に、静岡県の会社にお勤めになりました。こういう外国人でありながら日本を愛して、日本と母国の架け橋になる、そういう青年が増えてきていますね。

あるいは、先ほど発言者4さんがおっしゃったワールドカップですけれども、一昨年、2年前のロンドンのワールドカップで日本代表が南アフリカに勝ちましたね。あのときの日本の代表のキャプテンは何と言う名前か、リーチ・マイケルです。この方はお父様はニュージーランド人です。お母様はフィジー人です。日本に高校のときに留学で来ました。それで向こうは英語をしゃべりますから、日本語はできない。だけどラグビーやっているときに、だんだん日本語を覚えていって、それで日本の中でラグビーでラグーマンとして身を立てたいということで、あるときに日本人になる決意をする訳ですね。だから彼は日本人なんです。名前はリーチ・マイケルです。だけど日本の代表なんです。日本の選手からも、世界の選手からも尊敬されている人ですね。これからこういう人が増えていくと思いますよ。

ですから、宗教とか、あるいは肌の色とか、国籍とか、いろいろなものにこだわらずに、こちらでは差別されないで働ける、あるいは学べる、そして子どもは皆の財産ですから、同じように育てていく、こういうことが大事で、今傍聴者1さんの言われた、そういう時代がやってくると思っております。

アメリカは白人と黒人とか、まだそういう差別があったりしますけれども、ここはそう

いうことをしない、テニスの大坂さんのような人たちも出てきて、それを日本人は皆心から賞賛していますから、そういう時代を我々つくりたいと、そういう社会をつくりたいと思っております。努力をすれば、誰もが夢が叶うと、そういう地域をつくっていききたいと思っております。

それから傍聴者2さん、観光大使、ひとつよろしくこれからもお願いします。観光列車をということなんですが、これはまず天浜線が天竜の船を経営しているということを、私も県が株主だったんですけれども、知りませんでした。転覆して人が亡くなられて、それで天浜線は廃止しろとなったんですよ。

私はおっしゃったように、天浜線はいろんな歴史を刻んできているし、まだ役目があるということで、初代の社長を送り込んだんです。何とかとんとんのところまで、そして2代目の社長を送り込んだ。彼黒字にしたんですよ。

そして、台湾のきれいな日月潭という日本で言えば浜名湖に匹敵するような美しい湖がありまして、そこに上がっていく鉄道と天浜線が姉妹関係になりました。浜名湖とこの日月潭も姉妹関係になりました。日月潭にはロープウェイがあります。そのロープウェイと浜名湖のロープウェイも姉妹関係になって、向こうからたくさんの方が天浜線に乗りに来ています。それからまた「直虎」ブームで天浜線が流行った。今3代目です。

それで、天浜線は徐々に皆さんのおかげで存在を認められるようになった訳です。ところがレールも枕木も老朽化しているんですよ。車両も老朽化している。だけど、私は支えていきたいと思っております、これを県がずっとやっていくのもおかしいので、いずれ誰かそういう人が出てきて、経営してくださればいいなと思っておりますが、とにかく乗ることが大切で、利用するということが大切で、掛川から新所原まで、これを楽しんだり、特に観光で無人の駅もございますね、それを利用したいろいろな試みをなされているということで、支えていくということだけは申し上げたいと。すぐに新しい車両を買えるということはないからということで。

それから傍聴者3さん、本当におっしゃるとおりだと思いますよ。主婦というと何か働いてないみたいですがけれども、働いているんですね。ですから通常給金、サラリーもらいますね。あれは家族給と言われまして、半分は奥さんのものなんですよ。だから実は2分の1ずつな訳ですね。そういう考えを持つ必要があります。

ただ、いろんな事情で女性も学歴も高くなり、男の子たちに負けないわという若い女性も増えてきております。その人たちに働くなという訳にもいかない。働くもよし、働かざ

るもよし、選択も自由です。そして女性がお子様を産み育てて、そしてしっかりと愛情を注いでいく、これほど大切な仕事はまたないというふうにも思っておりますので、それが偏見を持たれてはいけない、偏見を持つてはいけない。

ですから、働いている女性を、「そんな事しないで子ども世話しなさいよ。」と言わない、また働かないで子育てを一生懸命やっている人たちに、「あなた何よ。」と言わない、そういう社会になって、それは男の方も、男の主夫に向いている人もいるみたいですね。ですから、いろんな形があるだろうというふうに思います。

ただどうして女性が働くようになったのかというと、日本の経済が大きく発展いたしました。同時に、女性の学歴が平成になりまして男と並びました。平成元年に、18 だった方は大学に入る訳ですが、そのとき男の子で大学に行くのと、女の子で大学に行くので、女の子の方がたくさんになったんですよ。だから今平成 30 年でしょう、そのとき 18 だった子は平成 30 年ですから 48 歳になっている。48 歳以下の女性は、男と比べて学歴が、これ平均ですよ、変わらないんです。

しかも、男の子なんかには負けないわよというそういう女性も育てていることは間違いありません。ですから県庁にも、今 2 人に 1 人ぐらいは女性が入ってきて、堂々とやっていますよ。だからそういう女性の社会進出というのも現実です。

一方、子育てというのが、これほど大切な仕事はありません。「子育ては 命をつなぐ 幸せの 愛を育む 尊い仕事」という、そういう歌もあるくらいで、子どもに勝る宝はないという山上憶良の歌も昔から言われてきて、これほど大切な、我々も人材を養成する、後継者を養成される、そして一番最初の人材づくりというのは子育てですから、これほど大切な仕事はないと。だから主婦に対する偏見がもしあるとすれば、それは誤りです。

ちなみに、私自身はこれ言っているだけ、そうじゃありません。私の家内は主婦をやっていますけれども、すべて財産も何も全部半分にはしています。だからそういう、おれが働いて、おれが金持っているから、おれのものだろうと、そんなことはしていません。そういうふうにしなないということが奥様に対しても、ちゃんと認めてもらっているということにもなりましょうから。まだ偏見に満ちている人もいます。女は家にいるものだと思っている人もいます。女性は働かなくちゃいけないわよと言っている人もいます訳ですね。だから両方とも意見があるということをおわかった上で、しかし偏見はやっぱりこれは正さないとはいけない。そういう御意見の 1 つをいただきましてありがとうございました。